

## Press Release

## 第36回(2021)京都賞受賞者決定

公益財団法人 稲盛財団（理事長 金澤しのぶ）は、第36回(2021)京都賞の受賞者を決定しました。

本年は、先端技術部門「情報科学」、基礎科学部門「生命科学（分子生物学・細胞生物学・神経生物学）」、思想・芸術部門「思想・倫理」より以下の3人が選ばれました。

京都賞は、科学や文明の発展、また人類の精神的深化・高揚に著しく貢献した方々を讃える国際賞です。受賞者にはディプロマ、京都賞メダル(20K)および賞金1億円が贈られます。

先端技術部門	アンドリュー・チャー・ヤオ	コンピュータ科学者 1946年12月24日生(74歳)
	清華大学 学際情報学研究院 院長 <b>授賞対象分野：情報科学</b> <b>計算と通信の新たな計算理論とそれに基づく安全性の基礎理論への先駆的貢献</b> 計算と通信の革新的な基礎理論の構築により、情報科学における新たな潮流を作り出し、暗号や量子計算などの最先端研究にも多大な貢献を果たすとともに、セキュリティ、秘密計算やビッグデータ処理などの現代社会における実問題にまで影響を与え続けている。	
基礎科学部門	ロバート・G・レーダー	生化学者・分子生物学者 1942年6月3日生(79歳)
	ロックフェラー大学 アーノルド・アンド・メイベル・ベックマン生化学・分子生物学教授 <b>授賞対象分野：生命科学（分子生物学・細胞生物学・神経生物学）</b> <b>真核生物の遺伝子転写メカニズムの原理解明</b> 50年以上にわたる研究で、RNAポリメラーゼ群、基本転写因子群や特異因子の最初の例など、転写に関わる多くの因子、各々の機能、クロマチンでの転写制御を発見してきた。それらの成果を通じて真核生物における転写制御機構の原理を解明し、生命科学の発展に大きく寄与した。	
思想・芸術部門	ブリュノ・ラトゥール	哲学者 1947年6月22日生(73歳)
	パリ政治学院 名誉教授 <b>授賞対象分野：思想・倫理</b> <b>科学技術と社会構造の相互作用に着目し、「近代」の根底的見直しを図る哲学の展開</b> 自然、人間、実験装置などを等しくアクターと見なし、科学技術をそれらのハイブリッドなネットワークの作動と記述して科学観に新風を吹き込んだ。自然と社会の二元論に基づく「近代」を見直す哲学を展開し、地球環境問題への提言を含む多面的活動は分野を超えた影響を与えてきた。	

(年齢は2021年6月18日現在)

## 第 36 回(2021)京都賞先端技術部門受賞者 経歴

授賞対象分野：情報科学

アンドリュー・チーチャー・ヤオ (姚期智/Andrew Chi-Chih Yao)

コンピュータ科学者

所属・役職 清華大学 学際情報学研究院 院長

### 略 歴

1946 年 中国上海生まれ  
1972 年 ハーバード大学 物理学博士  
1975 年 イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校 コンピュータ科学博士  
1975-1976 年 マサチューセッツ工科大学 数学科 助教  
1976-1981 年 スタンフォード大学 コンピュータ科学科 助教  
1981-1982 年 カリフォルニア大学バークレー校 コンピュータ科学部 教授  
1982-1986 年 スタンフォード大学 コンピュータ科学科 教授  
1986-2004 年 プリンストン大学 コンピュータ科学科 教授  
2004 年- 清華大学 高等研究センター (現 高等研究院) 教授  
2005 年- 香港中文大学 博文講座教授  
2011 年- 清華大学 学際情報学研究院 院長

### 主な受賞・栄誉

1987 年 ジョージ・ポリア賞  
1996 年 ドナルド・E・クヌース賞  
2000 年 ACM A・M・チューリング賞

会員： 計算機協会、国際暗号学会、台湾中央研究院、中国科学院、  
米国科学アカデミー、米国科学振興協会、米国芸術科学アカデミー

## 第 36 回(2021)京都賞先端技術部門受賞者 業績

授賞対象分野：情報科学

### アンドリュー・チャーチー・ヤオ

#### 計算と通信の新たな計算理論とそれに基づく安全性の基礎理論への先駆的貢献

アンドリュー・チャーチー・ヤオは、計算と通信の革新的な理論モデルを発案し、現代の計算理論の潮流を築くとともに、通信の観点から計算理論の体系を革新し、セキュリティ、プライバシー、並列計算、ビッグデータ処理、量子計算など、情報科学の最先端に大きな波及効果を与えた。

ヤオは、1977年、計算アルゴリズムによる問題解決を、敵対者を相手にした競合的な2人ゲームとしてとらえる解析モデルを提案し、乱数を用いる計算のアルゴリズムの性能限界の根本に関するヤオの最小最大原理を確立した(1)。1979年、2人の計算者が通信を通して協調計算をするモデルを考察し、計算問題の難しさを通信量で測る尺度「通信複雑度」の概念を提唱し、その斬新な解析法を与えた(2)。この新概念は、非常に独創的で波及効果が大きく、回路計算量、並列・分散計算、データ構造、ストリーム計算など、多くの重要なモデルの理論基盤を与えるもので、近年の計算量理論の飛躍的発展の多くがこの理論に依存している。

ヤオの研究は、その後、通信の安全性やプライバシーを考慮した理論に展開する。1981年、当時普及し始めた公開鍵暗号を用いた情報通信システムに対し、理論的に完備した安全性を定義し（ドレフ・ヤオのモデル）、通信手法の安全性の判定における基準理論を与えた(3)。また、1982年、シャノンの通信量の理論および通信の安全性の理論に計算量的な側面から拡張し、計算量的エントロピーの概念を導入することで、一方向性関数を用いたセキュリティの安全性を定量化し、暗号理論や計算量理論で重要な、擬似乱数生成における計算論的な検定法（ヤオの検定）を与えた(4)。

さらに、通信による安全な計算プロトコルの数論的に完備したモデルを考察し、個々の情報のプライバシーを保ったまま、敵対者を含む多人数で安全に計算を行う革新的な秘密計算法を提唱した(5)。ここでは「2人の富豪が互いの財産を開示せずに、どちらがより大きな財産を所有しているかを判定する」、いわゆる、ヤオのミリオンエア問題を設定し、その洞察から、情報プライバシーと安全性に対する満たすべき条件の厳密なモデルを構築した。これは、二値計算回路で計算するのと同等に近い効率で安全に秘密計算できる原理を示すもので、セキュリティ分野での金字塔となっている。

ヤオは、これらの研究で、電子商取引や暗号資産など、ネットワーク上で多者が、協調または対立しながら種々の課題を解決する現代社会にとって必須の概念やモデルを提供した。さらに、ヤオが提案した量子通信複雑度の概念とそれを基にする新原理は、量子コンピュータの能力の定量評価を可能としている(6)。ヤオによるこれら一連の業績は、情報科学分野に多大な影響と波及効果を与えており、京都賞の授賞に誠に相応しいものである。

## 参考文献

- (1) Yao AC-C (1977) Probabilistic computations: Toward a unified measure of complexity. In *Proceedings of IEEE 18<sup>th</sup> Annual Symposium on Foundations of Computer Science (sfcs 1977)*, IEEE: 222–227.
- (2) Yao AC-C (1979) Some Complexity Questions Related to Distributive Computing (Preliminary Report) In *Proceedings of the 11<sup>th</sup> Annual ACM Symposium on Theory of Computing (STOC '79)*, ACM: 209–213.
- (3) Dolev D & Yao AC-C (1983) On the security of public key protocols. *IEEE Transactions on Information Theory* **29** (2): 198–208.
- (4) Yao AC-C (1982) Theory and Applications of Trapdoor Functions. In *Proceedings of IEEE 23<sup>rd</sup> Annual Symposium on Foundations of Computer Science (sfcs 1982)*, IEEE: 80–91.
- (5) Yao AC-C (1982) Protocols for Secure Computations. In *Proceedings of IEEE 23<sup>rd</sup> Annual Symposium on Foundations of Computer Science (sfcs 1982)*, IEEE: 160–164.
- (6) Yao AC-C (1993) Quantum Circuit Complexity. In *Proceedings of IEEE 34<sup>th</sup> Annual Symposium on Foundations of Computer Science (FOCS 1993)*, IEEE: 352–361.

## 第36回(2021)京都賞基礎科学部門受賞者 経歴

受賞対象分野：生命科学（分子生物学・細胞生物学・神経生物学）

ロバート・G・レーダー（Robert G. Roeder）

生化学者・分子生物学者

### 所属・役職

ロックフェラー大学  
アーノルド・アンド・メイベル・ベックマン生化学・分子生物学教授

### 略 歴

1942年 米国インディアナ州ブーンビル生まれ  
1969年 ワシントン大学（シアトル）生化学博士  
1969–1971年 ワシントン・カーネギー協会（現カーネギー研究所）  
発生学部門 博士研究員  
1971–1975年 ワシントン大学医学大学院（セントルイス）助教  
1975–1976年 ワシントン大学医学大学院 准教授  
1976–1982年 ワシントン大学医学大学院 教授  
1979–1982年 ワシントン大学医学大学院 ジェームズ・S・マクドネル生化学遺伝学教授  
1982年– ロックフェラー大学 生化学・分子生物学研究室 教授  
1985年– ロックフェラー大学 アーノルド・アンド・メイベル・ベックマン教授

### 主な受賞・栄誉

1995年 ルイス・S・ローゼンスティール賞、ブランダイス大学  
1995年 パサノ賞、パサノ財団  
1999年 ルイザ・グロス・ホロウィッツ賞、コロンビア大学  
2000年 ガードナー国際賞  
2001年 ディクソン賞医学部門  
2002年 ASBMB・メルク賞、米国生化学・分子生物学会（ASBMB）  
2003年 アルバート・ラスカー基礎医学研究賞  
2012年 オールバニ・メディカルセンター医学・生物医学研究賞  
2016年 ハーバート・テイバー研究賞、ASBMB  
2018年 ハワード・テイラー・リケッツ賞、シカゴ大学  
2019年 貝時璋国際賞、中国生物物理学会

会員： 欧州分子生物学連合、米国科学アカデミー、米国科学振興協会、米国芸術科学アカデミー

## 第 36 回(2021)京都賞先端技術部門受賞者 業績

授賞対象分野：生命科学（分子生物学・細胞生物学・神経生物学）

### ロバート・G・レーダー

#### 真核生物の遺伝子転写メカニズムの原理解明

我々の体の細胞は、すべて同一の遺伝情報を持つものの、異なる形態と異なる機能を持つよう分化し、それぞれが身体内外の環境変化にユニークに応じ、協調して個体としての活動を可能にしている。真核生物に特徴的なこの細胞分化や応答は、基本的には各細胞での特異的遺伝子群の転写によって担われている。ロバート・G・レーダーは、動物細胞で DNA から RNA への転写開始に関わる一連の基本因子群とこれを特異遺伝子の転写に結びつける特異因子の最初の例を同定し、各々の働きを明らかにすることで真核生物の遺伝子発現制御の原理を解明、現代の生命科学研究の基盤を構築した。

レーダーは、試験管内で転写反応を再現する「無細胞再構築系」を用い、1969 年に真核生物の転写を担う RNA ポリメラーゼには、I、II、III の 3 種類があることを同定した(1)。ついで、1974 年に関し、RNA ポリメラーゼ I (Pol I) は、タンパク質合成に関わる 28S, 18S, 5.8S リボソーム RNA (rRNA) などの前駆体 RNA を、RNA ポリメラーゼ II (Pol II) は、遺伝情報をタンパク質に伝える mRNA 前駆体を、また、RNA ポリメラーゼ III (Pol III) は、5S rRNA や tRNA を転写することを解明した(2,3)。さらに、各々の RNA ポリメラーゼを精製し、これらと細胞核抽出物のさまざまな画分を組み合わせることにより、RNA ポリメラーゼは単独で働くのではなく、基本転写因子群と呼ばれるそれぞれに特有の多数のタンパク質と相互作用して基本転写開始装置を形成し、それらが遺伝子の転写開始点の近傍にあるプロモーターと呼ばれる領域を認識して転写反応が始まることを示した(4-9)。現在では、Pol I は 9 個、Pol II は 32 個、Pol III は 6 個の基本転写因子タンパク質を要することが明らかになっている。

真核細胞の遺伝子発現では、上記の基本転写開始装置に加え、環境に応じて特異的な遺伝子や遺伝子セットの転写を活性化するため遺伝子特異的転写因子と呼ばれる活性化因子が必要である。レーダーは、5S rRNA の特異的な転写を誘導する因子として TFIIIA を同定し、TFIIIA が基本転写開始装置複合体と Pol III を 5S rRNA 遺伝子に引き寄せて転写を活性化させる機構を明らかにした(10, 11)。これは遺伝子特異的転写因子の働きについて先鞭をつけた研究であった。現在では数百を超える遺伝子特異的転写活性化因子の存在が明らかになっている。これら遺伝子特異的転写活性化因子は多くエンハンサーと呼ばれる領域に働くが、エンハンサーは基本転写因子が働くプロモーター領域とゲノム上で離れていることが多い。レーダーは、さらに、これらエンハンサーに結合した遺伝子特異的転写因子とプロモーターに位置する基本転写装置がメディエーターという多タンパク質複合体により繋がれ、特異的な遺伝子の転写開始に働いていることを、哺乳類細胞で明らかにし、その機能を実証した(12, 13)。

真核細胞では DNA は裸では存在せず、ヒストンと呼ばれる塩基性タンパク質に巻きついてヌクレオゾームという単位構造をとり、これが連なりクロマチンを形成する。レーダーはこの真核

生物特有のクロマチンでの転写制御に研究を進め、基本転写因子複合体による転写開始にはこれらがヌクレオゾーム形成以前にプロモーターに結合していることが必要であること、一旦プロモーター領域でヌクレオゾームが形成されると基本転写因子の結合を阻害すること発見した(14, 15)。ついで、ヒストンアミノ末端尾部の修飾がクロマチン構造をとった DNA からの転写に必須であることを明らかにし(16)、2006年には不活性のクロマチンから転写を開始、伸長させるための80以上のポリペプチドからなるシステムの構築に成功した(17)。

以上、レーダーは、RNAポリメラーゼ群、基本転写因子群、特異的転写活性化因子とその働き、クロマチンでの転写制御を発見、真核生物での転写制御機構の原理を解明して生命科学の発展に大きく寄与した。その研究は50年以上に及び、道を究める不断の努力を顕彰する京都賞にまことにふさわしい。

### 参考文献

- (1) Roeder RG & Rutter WJ (1969) Multiple forms of DNA-dependent RNA polymerase in eukaryotic organisms. *Nature* **224**: 234-237.
- (2) Weinmann R & Roeder RG (1974) Role of DNA-dependent RNA polymerase III in the transcription of the tRNA and 5S RNA genes. *Proc Natl Acad Sci U S A* **71**: 1790-1794.
- (3) Weinmann R, Raskas HJ & Roeder RG. (1974) Role of DNA-dependent RNA polymerases II and III in transcription of the adenovirus genome late in productive infection. *Proc Natl Acad Sci U S A* **71**: 3426-3439.
- (4) Sklar VE *et al.* (1975) Distinct molecular structures of nuclear class I, II, and III DNA-dependent RNA polymerases. *Proc Natl Acad Sci U S A* **72**: 348-352.
- (5) Parker CS & Roeder RG (1977) Selective and accurate transcription of the *Xenopus laevis* 5S RNA genes in isolated chromatin by purified RNA polymerase III. *Proc Natl Acad Sci U S A* **74**: 44-48.
- (6) Weil PA *et al.* (1979) Selective and accurate initiation of transcription at the Ad2 major late promoter in a soluble system dependent on purified RNA polymerase II and DNA. *Cell* **18**: 469-484.
- (7) Matsui T *et al.* (1980) Multiple factors required for accurate initiation of transcription by purified RNA polymerase II. *J Biol Chem* **255**: 11992-11996.
- (8) Lassar AB *et al.* (1983) Transcription of class III genes: formation of preinitiation complexes. *Science* **222**: 740-748.
- (9) Horikoshi M *et al.* (1989) Cloning and structure of a yeast gene encoding a general transcription initiation factor TFIID that binds to the TATA box. *Nature* **341**: 299-303.
- (10) Engelke DR *et al.* (1980) Specific interaction of a purified transcription factor with an internal control region of 5S RNA genes. *Cell* **19**: 717-728.
- (11) Ginsberg AM *et al.* (1984) *Xenopus* 5S gene transcription factor, TFIIIA: characterization of a cDNA clone and measurement of RNA levels throughout development. *Cell* **39**: 479-489.

- (12) Meisterernst M *et al.* (1991) Activation of class II gene transcription by regulatory factors is potentiated by a novel activity. *Cell* **66**: 981-993.
- (13) Ito M *et al.* (1999) Identity between TRAP and SMCC complexes indicates novel pathways for the function of nuclear receptors and diverse mammalian activators. *Mol. Cell* **3**: 361-370.
- (14) Workman JL & Roeder RG (1987) Binding of transcription factor TFIID to the major late promoter during in vitro nucleosome assembly potentiates subsequent initiation by RNA polymerase II. *Cell* **51**: 613-622.
- (15) Workman JL *et al.* (1988) Transcriptional regulation by the immediate early protein of pseudorabies virus during in vitro nucleosome assembly. *Cell* **55**: 211-219.
- (16) An W *et al.* (2002) Selective requirements for histone H3 and H4 N termini in p300-dependent transcriptional activation from chromatin. *Mol. Cell* **9**: 811-821.
- (17) Guermah M *et al.* (2006) Synergistic functions of SII and p300 in productive activator-dependent transcription of chromatin templates. *Cell* **125**: 275-286.



## 第36回(2021)京都賞思想・芸術部門受賞者 経歴

授賞対象分野：思想・倫理

ブリュノ・ラトゥール (Bruno Latour)

哲学者

所属・役職                   パリ政治学院 名誉教授

### 略歴

1947年                   フランス ボーヌ生まれ  
1975年                   トゥール大学 博士  
1981-1982年             フランス国立工芸院 准教授  
1982-1991年            パリ国立高等鉱業学校 イノベーション社会学センター 准教授  
1991-2006年            パリ国立高等鉱業学校 イノベーション社会学センター 教授  
2006-2017年            パリ政治学院 教授  
2017年-                 パリ政治学院 名誉教授

### 主な受賞・栄誉

2013年                   ホルベア賞

会員：                   英国学士院、デンマーク科学文学王立アカデミー、米国芸術科学アカデミー、ベルギー科学文学芸術王立アカデミー

### 主な著作

1979年                   *Laboratory Life: The Construction of Scientific Facts* (with Steve Woolgar), Sage Publications.  
1987年                   *Science in Action: How to Follow Scientists and Engineers Through Society*, Harvard University Press. (『科学が作られているとき：人類学的考察』川崎勝・高田紀代志訳 産業図書 1999)  
1991年                   *Nous n'avons jamais été modernes : Essai d'anthropologie symétrique*, La Découverte. (『虚構の「近代」：科学人類学は警告する』川村久美子訳 新評論 2008)  
1999年                   *Pandora's Hope: Essays on the Reality of Science Studies*, Harvard University Press. (『科学論の実在：パンドラの希望』川崎勝・平川秀幸訳 産業図書 2007)  
2005年                   *Reassembling the Social: An Introduction to Actor-Network-Theory*, Oxford University Press. (『社会的なものを組み直す：アクターネットワーク理論入門』伊藤嘉高訳 法政大学出版局 2019)  
2012年                   *Enquête sur les modes d'existence : Une anthropologie des Modernes*, La Découverte.  
2015年                   *Face à Gaïa : Huit conférences sur le nouveau régime climatique*, La Découverte.  
2017年                   *Où atterrir? : Comment s'orienter en politique*, La Découverte. (『地球に降り立つ：新気候体制を生き抜くための政治』川村久美子訳 新評論 2019)

## 第 36 回(2021)京都賞思想・芸術部門受賞者 業績

授賞対象分野：思想・倫理

### ブリュノ・ラトゥール

#### 科学技術と社会構造の相互作用に着目し、「近代」の根底的見直しを図る哲学の展開

ブリュノ・ラトゥールは、自然、人間、実験装置などを等しくアクターと見なし、科学技術（テクノサイエンス）をそれらの混成体（ハイブリッド）としてのネットワークの作動と記述して科学観に新風を吹き込むとともに、自然と社会の二元論を支柱とした近代のあり方を見直す哲学を展開し、近年は近代の限界を露呈している地球環境問題の克服に向けた思想でも注目を集める。

ラトゥールは、哲学と人類学の知見を基盤に、まず実験室内の科学者の営みについての参与観察を通じた民族誌的記述をスティーヴ・ウールガーとともにまとめ、科学人類学という新たな分野を切り拓いた。その成果をもとに、ラトゥールは 1980 年代に入ると、パリ国立高等鉱業学校イノベーション社会学センターにおいてミシェル・カロンやジョン・ローなどの研究者と協力して、科学技術の研究開発のありようを記述する社会学理論であるアクターネットワーク理論を展開した。ここでは科学知識の生産が、社会制度、研究費獲得、研究室運営、実験器具、実験試料など、研究者個人以外の活動や装置をもアクターとして含むハイブリッドなネットワークの作動という視座から記述される。これは、不活性な物質的自然と、それを操作し篡奪する人間精神（とその社会）を対置する近代の二元論的発想を前提とし、またそれを強化してきた科学技術の自己理解に変革をもたらすものであった。

近年は、地球環境問題が近代の二元論的構図の破綻を示す事例の典型であり、その解決には人新世という視点を真剣に受け止める必要があることを主張している。すなわち、人間という主体が働きかける客体としての「自然」や人間を取り巻く「環境」という、「人間」に偏極した概念こそ、環境問題や気候変動を引き起こしている近代に潜む二元論的な発想の延長線上にあると指摘し、我々が生きる地表数キロの薄膜としての生命圏という、人間のみならず動植物、風土、気象、モノなどさまざまな地上的存在が織りなす世界（テレストリアル）に定位した、新たな世界 - 自然観に転換することによって、政治システム、社会システムを組み替えることが必要であると提言している。

人類学、哲学、社会学はもとより、広く経営学、地理学、政治学などの分野にも影響力を持つラトゥールは、こうした「テレストリアル」という世界 - 自然観を多くの現代人と共有すべく、自然科学者やアーティストとのコラボレーションにも積極的に取り組んでいる。ラトゥールのこのような多面的活動は 21 世紀の新たな学問のあり方を予示し先導するものである。

### 第 36 回(2021)京都賞行事について

授賞式および京都賞関連行事につきましては、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点により本年も中止いたします。

記念講演のみオンラインでの動画配信を予定しております。詳細は改めて京都賞ウェブサイト (<https://www.kyotoprize.org>) にてお知らせいたします。

行事	開催について
歓迎レセプション	中止
授賞式	中止
共同記者会見	中止
晩餐会	中止
ワークショップ	中止
鹿児島講演会	中止
記念講演	オンラインで動画配信

なお、海外における京都賞行事につきましては、現段階では下記のとおり開催を予定しております。

- ◆ **Kyoto Prize Symposium in U.S.A.**      2022 年 3 月 29 日(火)～31 日(木)  
米国カリフォルニア州サンディエゴ

地元の京都賞シンポジウム組織と共催大学により慈善晩餐会や講演会などが開催されます。来年で 20 回目を迎える本シンポジウムは、2002 年より毎年行われており、地元のイベントとして年々大きな広がりを見せています。

- ◆ **Kyoto Prize at Oxford in U.K.**      2022 年 5 月 10 日(火)・11 日(水)  
英国オックスフォード大学

オックスフォード大学ブラバトニック公共政策大学院の企画・運営により行われるイベントです。2017 年に開始され、受賞者と同大学院学長によるパネルディスカッションや受賞者のパブリックレクチャーが行われます。同大学は、京都賞の欧州における発信拠点という位置付けにあります。本イベントをもって当該年の受賞者による一連の京都賞行事は幕を閉じます。

## Press Release

### 第 36 回(2021)京都賞受賞者 写真素材（報道用）のご提供について

写真素材をご利用される場合は、画像番号（画像一覧より選択）・所属・氏名・電話番号・掲載媒体名(可能であれば掲載予定日)を明記の上、稲盛財団広報課（担当：中島・小泉）[press@inamori-f.or.jp](mailto:press@inamori-f.or.jp) までお申し込みください。

画像一覧		
先端技術部門 アンドリュー・チャー・ヤオ	基礎科学部門 ロバート・G・レーダー	思想・芸術部門 ブリュノ・ラトゥール
<input type="checkbox"/> A1 	<input type="checkbox"/> B1 	<input type="checkbox"/> C1 
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/> B2 	<input type="checkbox"/> C2 

#### <写真素材使用についての注意事項>

- ◎ 本写真素材は、第 36 回(2021)京都賞（受賞者発表）の広報を目的とする新聞・出版・放送（番組）・ウェブサイトにもみ使用してください。使用済の写真素材は、ご担当者が責任をもって破棄してください。
- ◎ 第 36 回(2021)京都賞受賞者発表以外での二次使用はできません。別途掲載等使用をご希望される場合は、再度申請が必要となります。

#### 【お問い合わせ】

公益財団法人 稲盛財団 広報課（中島 剛・小泉 道明）

TEL: 075-746-2523 E-mail: [press@inamori-f.or.jp](mailto:press@inamori-f.or.jp)

本プレスリリースのお問い合わせ先

公益財団法人 稲盛財団 広報課 中島 剛 ・ 小泉 道明

〒600-8411 京都市下京区烏丸通四条下ル水銀屋町620番地 COCON烏丸7F

T E L : 075-746-2523

F A X : 075-353-7270

E-mail : [press@inamori-f.or.jp](mailto:press@inamori-f.or.jp)

U R L : [稲盛財団] <https://www.inamori-f.or.jp>

[京都賞] <https://www.kyotoprize.org>